

---

# 人魔誤謬録

鷹尾括

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人魔誤謬録

### 【Nコード】

N4404S

### 【作者名】

鷹尾括

### 【あらすじ】

人類と悪魔との戦争が終わりを迎えてから、半世紀が経過していた。人類に降った悪魔は、わずかながら人間世界への居住を許され、ひっそりと暮らしていた。しかし彼らは、敗北を認めたわけではなかった。種族としての性質、「契約」の力による、静かな侵攻を開始していたのだ。

## 序章

「駄目です。これ以上は一日たりともまかりません」

目の前の男は冷徹に言い放った。

「そこを何とか。もう数日待ってもらえれば、必ずお支払いしますから」

「期日まで相当な余裕を設けたことを忘れましたか。こちらはすでに譲歩しています。それでも無理だと言うなら、何故契約を結んだのです」

商人は頭を抱えた。金額に目が眩んだ結果だった。大量発注とはいえ、相場の二割引きに近かったのだ。すべて売りさばければ相当な儲けになる。すぐにでもサインをしたかったが、相手の素性を考えて一歩だけ踏みとどまった。交渉を重ね、間違いなど起こらないという条件で契約を結んだ翌日、取引先の会社が倒産した。莫大な金が回収不能になり、支払いの目処が立たないまま、期日を迎えてしまったのだ。

「お願いします。不幸な事故だったんです。私の責任じゃ……」

「その倒産した会社の社長ですが」

運ばれてきたコーヒーストに砂糖をどばどば入れながら男が言う。

「悪魔との契約を反故にすると、小耳に挟んでいます」

深々と下げていた頭を、がばりと上げる商人。溢れる寸前までミルクを追加した男は、ゆっくりとカップを持ち上げ、頭を運んで口をつけた。

「浮気が妻に発覚して大変な修羅場になったそう。すべてをなかつたことにしようと、関係者全員の記憶を弄らせたとのこと。悪魔は、今後一切浮気をしないという条件で契約を交わしました。ところが、その三日後には新たな女と密会していたのですよ」

商人の手が震えた。記憶の操作ということは、悪魔に魔法の使用を依頼したということだ。内容そのものは下らないが、手段が高等

に過ぎる。その契約を破った以上、大きな災いが降りかかるのは当然だろう。

叩きつけられた拳がテーブルを揺らす。手付かずのコーヒーがこぼれた。

「あの人は確かに女癖は悪かったが、それにしたってこんな……」

「信頼の置けない相手と付き合うから、こういうことになるのです。あなたに責任がないわけではありません。このままだと」

言葉は悲鳴に遮られた。店の外を見ると、一匹の犬が初老の男の首に噛み付いていた。男の顔には見覚えがあった。近所に住む弁護士だ。どれだけ暴れようと犬の牙は離れない。彼を組み伏せたところで、棒を持った連中が割って入り、犬は打ち殺された。その頃、弁護士はびっくりとも動かなくなっていた。馴染みの女給仕が、悪魔との約束破つたらしいですよ、と耳打ちしてきた。

「あなたもあなるかもしれませんね」

「嫌だ、私には妻も子もいるんです。死ぬのも店が潰れるのも困ります」

「そうは言っても、これは私どもの体質の問題ですので。どうにもなりません」

がつくりとうなだれる商人を前に、甘ったるい液体を飲み干す男。伝票を手に席を立った時、店の時計が六回鳴った。

「ほら、こんなことをしている暇があるのなら、金策に走ったらどうですか。今日という日はまだ四分の一残っている。日付が変わる前に、142万7100カラン、耳をそろえて用意してください。ここは私が払っておきますから」

会計を済ませ、男が店の扉をくぐろうとした時、商人が何事か呟いた。ぼそりとした声だったが、その場にいた全員の耳にはつきりと届いた。「悪魔だ」と。

男はしばらく立ち止まった後、ぐるりと踵を返し、ずかずかと商人の元へ歩み寄った。自分が何を言ってしまったのか気づいた商人は、青ざめた顔で言い訳を繰り返す。男がずいと顔を寄せた。

「ですから」

言った男の顔が、商人と同様に青ざめ始めた。しかし、血の気が引いたのではない。全身の肌の色そのものが変化を遂げていた。顔に刺青のような模様が走り、髪は白銀に光り、頭からは山羊の角が、背中からは蝙蝠の翼が現れた。泡を吹いて倒れる商人。

「私は悪魔なのですよ」

## 第一章 1

人類と悪魔との戦争が終わりを迎えてから、半世紀が経過していた。異次元世界たる魔界から来たった悪魔に、一時は地表の半分を明け渡すまでになっていた人類は、英雄レイオリアの出現により、各地で攻勢へと転じた。力づくでの人界制圧に否定的だった魔界の宰相ナイキウスが、自らの軍団を連れて出奔するという、大番狂わせもあった。ついにはレイオリアを魔界へと送り込み、悪魔の指導者ザッハキールを打ち倒し、人類は勝利を手にしたのだった。

その後、人類に降った穏健派の悪魔は、レイオリアの後押しもあり、わずかな同胞を人界へと住まわせた。将来の両世界の交流を目指す、という名目であった。危惧する声も当然上がったが、最終的には居住を受け入れることとなった。人類最大の英雄の支持、そして何より劣勢を覆して戦いに勝利したという歴然たる事実が、人類の気を大きくさせていた。

悪魔など何するものぞ。栄光は人類にあり。  
そう思い上がった空気が流れるのも、致し方ないことだったのだろう。

真夜中を知らせる音が鳴った。それが鳴り止み、静寂が五分続いても、商人は現れなかった。

「駄目、か」

書類の作成を終え、ソルキウスはペンを置いた。

「少し厳しすぎはしませんか。不測の事態だったのは事実ですし、あの商人は悪人では」

「悪人とか善人とか、そんなことは関係ないのだよウルエロ。契約とはそういうものだ。それにあの社長は、浮気など問題にならないような悪事もいくつか働いていた。そんな男と懇意にしていたのは、やはり彼の落ち度だろう」

空になったカップを渡す。小姓はまだ納得のいかない顔をしている。

「いいことを教えよう。彼は善人か悪人かと問われれば、間違いなく悪人さ。何故って、取引しようとしていたのは麻薬の原料だよ？」

「え？」

ウルエロは瞠目した。危うくカップを落とすところであつた。

「お茶の葉だと聞いていましたが」

「葉っぱには違いはない。精製して摂取すれば天国に行ける魔法の葉っぱだ。そもそも、あんなちっぽけな個人商店の主を相手に、私を使つて取引しようと言つんだ。物騒なものであることは、依頼が来た段階で読めていたよ」

裏切りが絶対に許されない契約だからこそ、ソルキウスを介したのだ。莫大な報酬を支払つてまで彼を雇つたのは、それに見合うだけの見返りがあるからであり、彼への信頼の証でもあつた。

悪魔との契約を破れば災厄が降りかかる。

戦争への突入より遙か昔、力を欲する人間が儀式によつて悪魔を召喚していたような時代から、すでにその概念は存在していた。

悪魔は本質的に律儀であり、理によつて行動する。人間の側から代償を差し出せば、間違いなく契約どおりのものを与えてくれる。しかし、すべての契約行為がそう流れるわけではない。代償の支払いが後になる場合もあるだろう。そうになると、欲深い契約者の中には、何とかして代償を支払わずに済ませようとする者も現れる。あるいは、要求どおりのものを差し出さないのである。

こういつた連中は、尽くこの世の地獄を見た。降りかかる災厄は、悪魔による報復と考えられてきた。契約を結ぶ際に、そのような呪いがかかるのだとも。それがどちらも事実ではないと判明したのは、戦争が終わつた後のことだ。

半世紀前、人類は初めて知ることとなつた。

悪魔とは、そういう体質を持つ種族なのだということを。

「彼のことは気の毒だと思う。品物はすぐに売りさばいて大金を得

たが、それも掛け金の支払いに使ってしまったね。当てにしていたのは、倒産した会社から回収する予定の金だけだったのだよ。運が悪いとしかしいようがない」

「でもそうになると、依頼主様はお怒りになるのではありませんか？

旦那様に依頼をした意味が……」

「何か勘違いしているようだね、ウルエロ」

ソルキウスは薄っすらと笑った。

「私は金が回収できなくなったとは一言も言っていないよ？」

「え……」

どういうことか、と聞くのを遮るかのように、ソルキウスは声を上げて背伸びをした。つられて欠伸が出そうになるのを、ウルエロは噛み殺した。

「もう休みなさい。明日も早い、私も寝ることにするよ」

そう言つて主が寝巻きに着替え始めたので、ウルエロは従うしかなかった。部屋を出て鍵をかけ、しばらくそのまま扉を見ていると、いくらもしないうちに規則正しい寝息が聞こえてきた。

話の続きは気になったが、これ以上考えるのはやめにした。主の言うことに間違いなどあるはずがない。そして明日になれば、自然と答えが分かるのだろう。彼はそういう男なのだ。

主の目から逃れた小姓は、遠慮なく欠伸をし、廊下の奥へと消えていった。

翌日、近くの川に死体が浮かんだ。あの商人であった。



## 第一章 2

よく晴れた日になった。朝から取引先を回り、予定していた仕事を午前中に終えた。行く先々で、商人の死についての話題を聞かされた。どれも適当に受け流し、三番目の訪問先で昼食に招かれた後、帰途に着いた。

川にかかった橋の近くを通りかかると、人だかりができていた。城の兵が川に潜って何かを探している。それを見物に来ているのだ。橋の周辺は兵に固められていて、野次馬を鬱陶しそうに抑えている。商人の死体が上がったのがここだった。橋脚に引つかかっていたという。だがそれは首だけで、残りの部分は細切れになってあちこちから発見された。未だにすべてがそろわず、搜索はかなり下流の方まで及んでいるようだ。

そこかしこで商人の噂が囁かれている。彼が後ろ暗い商売をやっていることは、周辺住民にも薄々感づかれていたようだ。自業自得だ、と誰かが言った。

橋を渡ろうとしたところで、悪魔二名の存在に人々は気づいた。一瞬会話が止まったが、ソルキウスが会釈して通り過ぎると、また元のひそひそ話へと戻っていった。

今回の件にソルキウスが関わっていたことは公になっていない。知っているのはあのカフェの連中くらいである。だが、商人の殺され方を見れば、悪魔絡みの事件ではないかと勘繰られるに決まっている。

「あいつめ、派手にやってくれたな」

ゆっくりと橋の上を歩きながらソルキウスが言う。

「あれは、やはり」

「契約違反の災厄じゃない。あいつの仕業だ。金を用意する最後のあてとして教えておいた。どんな代償を背負わされるかはわからない、と付け加えて」

その結果があつた有様、と。頭だけでも無事な形で残っていたのは、せめてもの情けということだろうか。諦めて契約違反の災厄を受け入れるのと、果たしてどちらがましだったのか。確かめる術はない。緩やかな曲線の頂点に指しかかろうとした時、その向こうからぬつと頭を見せた者がいた。鉢合わせた者を蹴散らさんばかりに、ただ橋の真ん中を歩いている。老人がぎよつとして道を譲った。

背の高い、がっしりとした体格の男だった。不敵な笑みを浮かべてこちらへやってくる。ウルエロは思わず足を止めたが、主人が構わず進むので慌てて駆け寄った。橋の真ん中で両者が会合う。が、お互いに目もくれようとしない。

男は無言で持っていた鞆を差し出した。同様に口を閉ざして受け取った主人から、そのまま鞆を手渡されるウルエロ。ずっしりと重い。

「お疲れ様、と言いたところだが」

すれ違いざま、ソルキウスが言った。

「やり方がまずいぞマルベルグ。よりもよつてお前の爪をかましてな」

「あれで済ませてやったのだ。人が女のところに出かけようとした矢先にアポなしで飛び込んできたので、面倒になつてな。手早く本人の命を代償にしたまでだ。まあ、おかげで俺自ら金を届ける羽目になつたが」

烈斬の悪魔はさらりと言った。横目で冷めた視線を送るソルキウス。

「一つ忠告しよう。旧時代の考え方は捨てた方がいい。我々はより実益のあるやり方を目指すべきだ。あんな男の命をもらったところで、何のうまみもない」

「ならばこちらも一つ聞きたい。実益を得るなら得るで、何故こんな遠回りなやり方を選んだ？ お前の力なら履行を強制することも、金のかたに店を奪うこともできたはずだ。わざわざ俺から金を借りさせてまで、本人の意思で金を返すよう仕向けたのは何故だ？」

「そういう時代だということだ。私は枢密院の決定を遵守しているにすぎない。『千年計画』はもう始まっているのだ。お前だけ従わないわけにはいかないぞ」

「なるほど。俺の出方を見る意味もあったわけか。見くびられたものだ。宰相閣下のお考えは俺にはよくわからんな。あのまま行けば、そう遠くないうちにこの世が手に入っていたものを。馬鹿なことをしたものだ」

立ち去ろうとしていたソルキウスの足は、そこで止まった。お互いに背を向けた二人の間に、稲妻にも似た何かが走ったと、ウルエ口には感じられた。周囲の人々もそれに気づいたのか、三人のそばを足早に駆け抜けていく。橋の上に悪魔だけが残された時、ソルキウスは口を開いた。

「父と王と、どちらの考えが正しいかを議論するつもりはない。最終的には理ではなく情で決めるしかないのだから。ただ、指導者が変わったからにはそれに従うべきだ」

「そして従った結果が今の立場か？ 若様」

マルベルグは振り返った。変わらず笑みのままである。しかしそれは、敵を前にした獣を思わせる、ひどく攻撃的なものだった。ソルキウスは背を向けたまま言った。「そうだ」。

「人類は自らの欲望により、悪魔にすべてを差し出すのだ」

歩き出した主人に遅れまいと駆け出すウルエ口。数歩進んで立ち止まり、くると反転して頭を垂れた。主人の悪友が後ろ手に去っていくのを認め、再び主人の背を追う。ウルエ口は聞き逃さなかった。背後の男が低い声で呟くのを。

「期待してるぜ、常闇の悪魔」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4404s/>

---

人魔誤謬録

2011年5月8日01時25分発行